



挫折を乗り越え、

初の全国の舞台上で躍動

杉田文太さん (16歳・忍)

今月は、東京農業大学第三高等学校弓道部に所属し、平成24年12月に行われた第31回全国高等学校選抜弓道大会(以下全国大会)で団体3位の原動力となった杉田文太さんを紹介します。

高校から弓道を始めた杉田さん。きっかけは、同校で配布している入学案内のパンフレットでした。そこには弓道部が紹介され、弓を引く上級生の姿が載っていたそうです。杉田さんは「弓道って格好いいな。この学校で挑戦したい」という思いがわき、弓道の強豪校である同校に進学しました。



わくわくしながら弓道部に入学しましたが、すぐに矢を射せてもらえませんでした。「日本の矢を射るまでの基本動作『射法八節』を徹底的に教え込まれました。本当に射させてもらえるのかと不安に感じたこともありまして」と入部当初のことを思い出しながら語ります。矢を射ることが許されたのは、入部して2カ月後。「28メートル先にある直径36センチメートルの的に、初めはまったく的中させ

ることができませんでした」弓道の難しさを痛感し、人一倍練習に励んだ杉田さん。1年生の秋には、公式戦に出場できる団体メンバーに選出されるほどの実力がついていました。ところが、2年生の春に調子を落とし、インターハイの県予選では団体メンバーから外されてしまいました。個人戦でも結果を残すことができず、弓道を辞めようと思ったことも。それでも、これまで努力してきたことを思い出し、「ここで辞めてはだめだ」と自分に言い聞かせ、これまで以上に練習に力を入れました。

上級生が引退した後、団体メンバーの中心選手として新人戦に出場しましたが、入賞することすらできなかったそうです。折れ掛かっていた心を必死の思いで立て直し、「次の大会では、新人戦のリベンジをする」と強い気持ちで臨んだ全国大会の県予選。これまでのうつぶんを晴らすかのように何本も的中させた杉田さんは、チームの優勝に貢献し、念願の全国大会へ出場することができました。全国大会では、惜しくも準決勝で敗退。3位の結果に、「自分たちは日本一になることが目標だったので悔しかったです。インターハイでは絶対優勝します」と大きな目標に向かって、すでに気持ち切り替えています。

「弓道は、精神的な部分が大きく影響する競技です。技術だけでなく精神力も磨こうと思います」と語る杉田さん。その両方を兼ね備えたとき、インターハイ優勝という栄冠をつかみ取ることができるといいます。

私の作品

俳句

忍 岡田 修
念入りに窓拭きて待つ鶴かな

白川戸 鈴木 都子
数へ日や人を誘って仲見世へ

荒木 島田 香子
向い風耳まで深く冬帽子

須加 須加かづ江
着ぶくれを笑い合つてる散歩道

清水町 新井 圭三
失せしもの出でて投げ出す煤猫

持田 中野 諄子
立てた尾に冬日の光る無頼猫

南河原 今村 文女
呆けまじと一日一句日記果つ

城西 八木橋近蔵
渡良瀬の昔をしのぶススキ原

荒木 蛭間しげ子
年の瀬の喪中はがきに胸騒ぎ

谷郷 吉野 六郎
年の瀬に折り紙飾り孫思う

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日まではがき・封書で広報広聴課へ応募ください。

谷郷 鶴崎 信行
夕暮れの靴まで急かす虎落笛

持田 伊藤 洋子
この人と生きるしかなしもがり笛

城西 山下 利江
木枯や吹く風強く頬を刺す

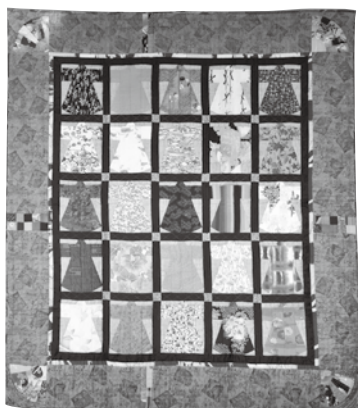
持田 小倉 繁三
ペダル踏む子等の声なし冬休み

渡柳 武笠 文子
樹々の間に光り跳びかう小春の陽

(木島 斗川 監修)

「思い出の着物」(パッチワーク)

嶋田 雪江(須加)





新井 心龍ちゃん(埼玉)
父・正俊さん 母・真紀さん
平成24年2月14日生まれ
「兄弟仲良くね♡」



角田 篤紀ちゃん(藤原町)
父・昌靖さん 母・久美子さん
平成24年2月2日生まれ
「スクスク元気に大きくなってね♡」



加部 颯大ちゃん(長野)
父・政行さん 母・愛子さん
平成24年2月8日生まれ
「笑って泣いて大きくなあれ!」



堀口 愛奈ちゃん(中央)
父・豊さん 母・安弥子さん
平成24年2月13日生まれ
「お姉ちゃん大好き♡」



池崎 望来ちゃん(佐間)
父・康裕さん 母・久美子さん
平成24年2月29日生まれ
「お兄ちゃんと仲良くね!」

平成24年4月生まれの
お子さんを募集します

○2月1日(金)~28日(休)に電話またはEメールで広報広聴課広報広聴担当(内線318)
※応募要領は市ホームページをご覧ください。
○応募者多数の場合は、3月4日(月)午前11時から市役所203会議室で公開抽選を行います。



さわやか サークル

須加公民館パッチワーククラブ ~大切な思い出を継ぎ合わせて~



生地の切れ端を継ぎ合わせて、彩り豊かな一枚の布を作り出すパッチワーク。今月紹介する須加公民館パッチワーククラブの皆さんは、一針一針心を込めて手縫いした

力を感じました。須加公民館の講座をきっかけに発足した同クラブは、今年で結成23年目を迎えます。現在は9人のメンバーが在籍し、毎月第2・4金曜日の午前9時30分から11時30分まで、窓の外に広がる田園風景を眺めながらのんびりと活動しています。やさしい色合いのかばんやポーチ、タペストリーなど、同クラブの皆さんが作るものはさまざま。講師の嶋田雪江さんが色や素材にこだわって選んだ生地や、メンバー自身で選んだ生地を使い、各自のペースで世界に一つだけの作品を作っています。また、おしゃべりも楽しみの一つで、夢中になって針を進める傍ら、料理や孫の話に花を咲かせるなど、気心の知れた仲間との話題は尽きません。パッチワークは、自分が若いころに着た着物や、母親の着物の残り布など、思い出の詰まった布を再利用することができます。これも魅力です。「捨てられず、たんすにしまい込んでしまうような布でも、別の作品

に生まれ変わることで、いつもそばに置いて使うことができます」とメンバーの皆さんはうれしそうに語ります。作品は、自分で使うことはもちろん、子どもや孫、友人にプレゼントするというメンバーの皆さん。贈る相手の喜ぶ顔を思い浮かべながら作ることで、作品への思い入れがより一層深まるそうです。小さな生地の切れ端からは想像もつかない、立派な作品が出来上がるパッチワーク。「一見難しそうですが、一針縫えれば、あとはひたすらそれを繰り返すだけなので、手芸に苦手意識を持っていても大丈夫。あきらめず、こつこつ続けることが大事です」と語る皆さんは、今日も大好きなパッチワークに囲まれて、充実した日々を過ごしていることでしょう。

▼問い合わせ 橘 ☎556-6047

